

(千載和歌集雜十八)山寺にこもりて侍ける時、心ある文を女のしばくつかはし侍ければ、よみてつかはしける。

空人法師

おそろしやきそのかけぢの丸木橋ふみみるたびに落ぬべきかな

(新續古今和歌集十羈旅)羈旅の心を

稱名院入道内大臣

こえ暮て獨やねなん里遠き山のかけぢの苦のさ筵

(謡曲)紅葉狩

上歌 同 馬よりおりて沓をぬぎく、道を隔て山陰の岩のかけぢを過給ふごろづかひぞたぐひなきく。

(倭名類聚抄一)田園 瞬 四聲字苑云、田間道、昌雪反、漢鈔云奈八

(類聚名義抄二)田 瞬 音綴、昌雪反、ナハテ

(伊呂波字類抄奈)地儀 瞬也、ナハテ、盼同

阡 阡音千、行南北爲

陌 陌東西爲

畔 畔

疇 疇

培 培

壠 壠

上

一

(下學集上)繩手也

(運歩色葉集那)瞬

(書言字考節用集乾)坤 瞬也、井田 瞬也、出太

上並

繩手

俗

(日本釋名地理)瞬 間隙會、井田

同上

並

繩手

田間の道を云、なは、繩也、なはのごとくほそき也、てはちと通す、ちは路也、なはみち也、又なは、直なり、すぐなるみち也、

(倭訓某前編十九)なはて 和名鈔に瞬をよめり、繩手の義、直なる道をいへり、籍田賦に、遐阡繩直邇陌如矢と見えた、字書に、瞬は田間道といへり、略下

(太平記二十六)四條繩手合戦事附上山討死事

武田伊豆守ハ千餘騎ニテ、四條繩手ノ田中ニ馬ノ懸場ヲ前ニ殘シテ扣ヘタリ、